



産学教育連繫講座：社会人としての女性の生き方

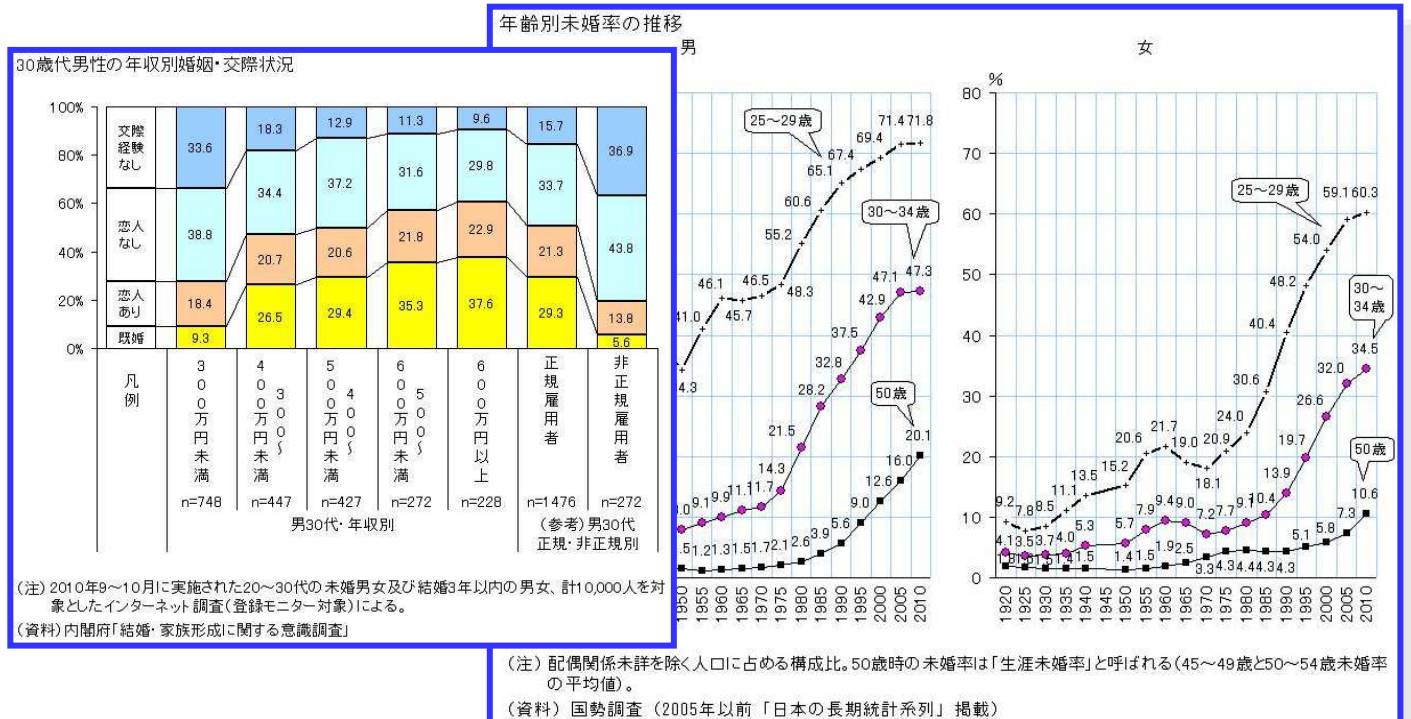
毎日新聞社 「教育と新聞」推進本部 大学支援センター 上杉 恵子 氏

男女雇用機会均等法(1986年4月施行)は全面改正(97年)後、2007年に再改正、今年7月1日からは改正された施行規則が施行されます。直接的な性差別ではない、状況によって実質的に差別につながるような間接差別について、範囲が拡大されています。厚生労働省は、労働者が性別により差別されることなく、また、働く女性が母性を尊重されつつ、その能力を十分に発揮できる雇用環境を整備することが重要な課題であることを述べています。



政治と産業の世界への女性の進出拡大は、今日の社会における中心的課題のひとつです。しかし、会社で働くことの現実においては、女性にとって実際に乗り越えられなければならない問題が多く存在します。

統計的データを参照し、また自身が新聞社の女性記者として直面してきた経験を紹介しながら、上杉さんは「自分がどう生きるか、納得のいく選択を」と学生たちに語りかけました。道を切り拓いてきた一人の先輩として、後輩たちへの思い、期待が伝わってくる講義でした。



現代生活学科は、「環境」を理解し、「メディア」の技術と考え方を身につけ、
「自立」した社会と暮らしづくりを構想し、実践するための教育を展開します。
私たちとともに、女性ならではの視点で、新たな社会づくりを考えていきませんか？

毎日新聞 上杉さんの講演を聴講して 現代生活学科1年生の感想

講演を聴いて、現代生活学科の1年生が感想を記録しました。その一部を紹介します。

世の中に出ると様々は女性がいそいですが、自分の道を進んでいこうと思います。
今回のお話で多くのことを学び、特に、女性としての話には聞いていてために
なることはわかりました。今回のこともふまえて、今後も考えてゆこうと思います。
育児をする女性は、融通も利かないし、社員として扱うのは、
面倒である、邪魔であるのかもしれないけれど、私はいまどきにある
男女不平等な世の中を変えていくためにどうすればいいの
私は考え、行動にうつしたいと思つた。



女性の視点・立場から仕事と働くことについての話、また
考え方や思いなどを聞くことができてよかった。
しかし、「女性だから命題、女性だから子育て」とか「女性だから」という意見

「気がもう少し減れば」、もっと考えたい、生かされるのにねと感じました。
今まで育児・産休を企業はもっと増せばいいと思っていたが、企業にも
事情があったりするのを聞いて良かった。少し考え方が変わったなあ
と思う。



女性への配慮がしっかりしている企業に就職出来ることか、
今の私の一番の願いだ」と思いました。
この大学4年間のうちに、女性の生き方について考え、自分が
思い描くような人生を送れるように学んでいきたい。

若い人は必ず上司に怒られたりするとやめるから我慢が足りないと言われて
いる面があります。でも自分はそういう風にはなりたくないので、怒られても
それは自分にはできないけれどと言わぬ、改善したり、仕事をミスをした
なら、そのミスを取り返したいという気持で、何ごとにも取りくみたい。でも
女性が働く環境はまだまだ「厳しいと思うけれど」、もう少し全体的に
改善されてほしいと感じました。



男女雇用機会均等法を出されても、出産、育児をしながら社会で働けとい
うのは、出産、育児をするとあまり残業ができなくなるなど、周りから思われるよう
に、部を移動させられたり、昇格できなくなるのは、男女平等と言うのが、

何十年も働く会社で自分のやりがいをもたないままではいけません。
と思います。なので本当に自分は何を今したのかを今見つけ
なければいけないと思いました。
とても貴重なお話ありがとうございました。

自分は結婚をして仕事を頑張りたいと思、こ
い（ママ）今回の講義を聞いてパートや専業主婦
のメリットについても考えてみようと思った。

私はまだ「この職に就きたい」という強い思いがないので、この大学で
様々な経験をして、自分の将来を考えて行動したいと思っています。
本当に勉強になるお話が聞けたことも良かったです。
1916

